

山口勇子著

かあさんと 呼べた日



のさりと呼べた日

山口勇子著

草土文化

かあさんと呼ばれた日

一九七八年七月二〇日 第一刷発行 ©

編者 山口 勇子

発行者 田 辺 徹

印刷所 大 永 舎

発行所 株式会社 草 土 文 化

東京都千代田区五番町一〇一六
電話(二六四)〇六三二(代表)
振替 東京 五―四六二二二

はじめに

いまに、スーパーマーケットで材料を買い、少年でも簡単な核兵器なら、作れる時代がくるだろう。そんな記事さえ、目に入るこの頃です。プラモデルでも組み立てるようにして、核兵器が作られる。そんなことになったとしたら、と考えると目の前に、荒涼とした沙漠が広がっています。

沙漠といえ一九四五年八月、広島町は原子沙漠となりました。そのただ中にほり出された子どもらに、少しでも人間らしい暮らしをとるもどかせたい、と多くの人が力が合わせた。その記録「かあさんと呼ばた」(草土文化刊)を、一九六四年に編集しましたが、広島島の原爆孤児の歩みをいま一度、みつめなおさなければならぬときになってしまった、と痛感せずにはられません。原爆孤児の痛みは、少しも昔話の思い出とはなってくれないからです。

その子らがどのような子ども時代を送り、現在どう生きているのか、その道すじをたどるところから、核兵器を開発し続ける側と、その廃絶を切望するわたしたち、世界の多数の側との区

別を、はっきりさせたいと思います。

「人間のしあわせと核兵器は、絶対に両立しない」。その真実を子らの歩みの中から、くみとっていただきたいと願うものです。

一九七八年 六月

山口 勇子

かあさんと呼べた日

もくじ

わたしの原爆

一枚の色紙 7

あの夏の朝から 15

さしのべられた愛の手 24

原爆孤児との出会い 39

八十五組の“心の親子” 52

かあさんと呼ばれた日

さびしい影 65

編んでもらった手ぶくろ 71

お金をめぐって 77

砂漠の国からきた贈物 85

ふれあう心

遠くでみつめています 105

ごめんなさい、かあさん 140

広い世界へ

ふたたび原爆孤児をつくるな 151

おとうさんを殺した戦争 164

小さくなるばあちゃん 170

シンデレラの夢 186

奨学金がほしい 194

団らの日の笑い 211

ピストルと若ものの死 216

雪国のたより 93

たしかなあすを

いま、親となつて 229

人間の勝ち 238

原水爆のない世界 244

装幀 坂口 頼

カット 金子 静枝

わたしの原爆

一枚の色紙

角ばった、大型ハترون封筒が、配達されてきた。郵便受けから半分、はみ出している。ひっぱり出して裏をみたら、「広島子どもを守る会有志の集い」とあった。もどかしく開くと、一枚の色紙が出てきた。名前の寄せ書きで埋まった色紙だ。肩を寄せあって書かれた名前は、どれもなつかしい。

潔、礼子、恭良、圭二郎、昇……。

思わず一人ずつを、声に出して読みあげた。いかつい文字や細っこい文字、サインペンのさまざま



な書きぶりをみつめていると、一足とびに二十年昔のあの頃に、ひきもどされてしまいそうになる。いまはもう、みんなおとなになっているというのに、わたしの目に浮かんでくるのは、やはり小学生、中学生たちの顔だ。

手紙も一通はいつていた。代表して敏子を書いた手紙だ。

「お元気ですか。東京に行かれてから、ずい分長いことお会いすることありませんね。広島はいま若葉です」

きちようめんな文面が、一層昔をよみがえらせる。あの頃、どの子の身のまわりにも、さびしい空気が、ひっそりとただよっていた。ちようど、暈のある月のように、どんなに笑っても、走っても、歌をうたっているときでさえ、そのかげはとれなかった。ヒロシマの子、原爆孤児、という名で呼ばれ、生活の苦労と、心の奥深くにかかえている、たとえようもない孤独感が、小さな一人ひとりの肩をきびしくおさえつけていた。

広島子どもを守る会事務局の窓から、通りをみていると、哲也や邦彦が、ややうつむき加減にやってくる。満子、恵美子が静かな足どりで近づく。子どもたちは、孤独のかげの下に、つらいことをすっかり包みこんでいて、その深いところまでは、めったなことではのぞかせなかった。

「孤独と欠乏と原爆症の不安のどん底にあえぐ」、子どもらの救援は、もはや一刻を争う問題だ、と原爆孤児救援のとりくみが、まず学生たちの手で始められたのは、敗戦後七年を経た一九五二年も、おしつまったときだった。その運動は学生からおとなたちへ、広島子どもを守る会へとひきつがれ、

一人、また一人、と原爆投下によって、一人ぼっちになってしまった子どもが、みつけ出されてきたのだ。そして救援活動は、子らが満十八歳に達するまで続けられたのだが、最初のときから数えるとすでに二十余年が、経過したことになる。

広島子どもを守る会に集まった、八十五名の子どもの中の、十数名の名前がいま、わたしの目の前に迫り、わたしに呼びかけてくる。手紙を何度も読んでサインペンの名前をたしかめ、また読んでたしかめ、子どもたちのたどった、あれからの年月を思った。

「……広島子どもを守る会に集まっていた、わたしたち八十五名が、次々に満十八歳を越え、一番小さかった秀子さんや、靖夫君たちも十八歳になって、広島子どもを守る会も一応終わってからこっち、わたしたちはいままで一度も、会う機会もありませんでした。いま、わたしも二人の子の母です。みんなもそれぞれ、忙しい日々を息つくひまもなく、送っていることでしょう。広島にいて、連絡のとれる者だけでも、一度会ってみたいということになりました。それで電話帳を調べたりして、やっときょう、十数名が集まりました。なつかしさひとしおです。あの頃の話に花を咲かせました。光憲君、勝三君兄弟は、とても立派な体格で、昔とは想像もつかないほどでした。一記君は、やはりおとなしい感じ。日ノ出町に魚屋さんを開いておられるそうです。奥さんと赤ちゃんも一緒でした。千寿江さんは、子ども二人連れておられました。圭二郎君も奥さんと。勉君は一家四人で……」

手紙は一人ひとりの近況を伝えている。少年少女から一足とびに、おとなになって再会した日の、にぎやかなおどろきの声が、手紙と色紙から湧きだってくる。ほとんどが家族ぐるみで出席したとい

うその日の光景を、子ども時代の孤独とだぶらせて、思い浮かべた。

当時、わたしは広島に住んでいた。原爆孤児救援のとりくみが始められたとき、ためらいもせず、その中にはいついっき、気がついてみたらその仕事は、わたしの日常そのものになっていた。それまでわたしは、そういった社会的な活動というものに、加わったことはない。夫と三人の子どもの一家五人暮らしの日々が、敗戦後のわたしをとりまく、全世界といってもよかった。それなのに、原爆孤児救援の呼びかけにだけはごく自然に、参加するのがあたりまえのことのような気がして、二つ返事で応じてしまった。わたしも被爆者だから、まして原爆孤児だから、その活動にすんなりと、はいっていったのだ。もっとも、わたしも原爆孤児だから、などというわけにはいかない。孤児とは親を失った子どものことだから、おとなになってから親を失っても、原爆孤児の中にはいらないことはわかる。しかし、呼びかけのプリントに、「原爆孤児」の四文字をみたとき、その熟語のところだけひとときクローズアップで迫り、わたしのごく身近に、ほんとの原爆孤児がひしめいていることに、始めて気づいた始末だった。

なぜそれまで、原爆で親を奪われた子どものいることに、気がつかなかったのだろう。いや、いることはわかっている、わたしの心がその方向にむかなかったのだ。プリントの四文字、原爆孤児という組み合わせをみておどろいてしまい、思わず目をみはってみつめた。まるで、そういう熟語に突然ぶつかったようで、あわてた。そして心の中で、そのように呼ばれなくてはならない子どもが、現実にはわたしのすぐとなりにいたのだ、と叫んだ。しかも一人や二人ではない。広島市内だけでも千人

を越すだろうという。そこまで考えて、息づまった。

わたしの父、母を無残に、全く文字通り一かけらの残りもなく、殺してしまった原爆は、何年経とうとわたしの頭を離れることはない。被爆当時から七年余経っていたが、そのとき原爆は、わたしと直線的に結びついていたので、たくさんの子どもたちが、わたし同様父母を失ったことにまで、考えが及ばなかったのだろうか。プリントに顔を伏せたいくらい、申し開きのたため気持ちに、おそわれてしまった。わたしはおとなになってから、父母を殺された。しかし子どもたちは、ごく幼い頃に奪われたのだ。わたしにくらべ、何倍も、何十倍も、無残なことではないか。

生後五十日だったという邦生。五十日では、目もみえたかどうか。手広く商いをしていた両親と子どもたちは、広島市内で「のんびり」暮らしていたらしい。末っ子の邦生は、被爆前の話になると、すべてに「らしい」をくつつける。生き残った兄からのまた聞きなので、夢の中の話をする気分になるのだ。夢の話にしても、生後五十日間は、自分にもんぴりとした暮らしがあったことを、邦生は強調した。のんびり暮らしていたらしい、というとき、かすかに口元がほころぶ。焼け跡の炎天下に、生後五十日の赤ん坊は、うつぶせに転がっていた。背中一面のやけどで、赤むけのかたまりに小さな手足が、くっついたようなものだったそうだ。母は即死、父は行くえ不明で、骨さえない。どうして助かったのだろうか。「生き運があったんじゃないろう」。邦生は他人ごとのように、ぶっきらぼうにつぶやく。後頭部にも傷跡がかぎ型に大きいので、いつも帽子をかぶっていた。始めて会ったときは真夏だったが、八歳の邦生は兄の後ろから、むぎわら帽の顔をのぞかせた。つばの下顔は、うす黒くみ

えた。日焼けの黒さだけではないように思えたが、それでは何のせいのうす黒さか、とっさにはわからなかった。多分、食べて、着て、寝る一日、一日を、自分でやり通さなくてはならないことが、小さい邦生にはつらすぎるのだ、それでおとなじみたうす黒い顔を伏せているのではないか。漠然とだがそんな思いが胸をひたしていき、この子とむかいあうことになったきびしさに、身がひきしまった。一九四五年八月六日午前八時十五分、広島市上空九千六百メートルに、米軍爆撃機エノラ・ゲイ号があらわれた。突如、あらわれたのではない。何年間、練りあげた計画のもとに、きっちり目標を定め、世界最初の原爆を投下する目的で、命令通りやってきたのだ。米軍基地テニアンから、予定時間を二分と違わず機は飛来し、原爆を投下して間髪入れずとび去った。四十万広島市民は真夏の朝、目の前に「太陽が落ちた」、と瞬間身を伏せるひまもなく、「ピカ・ドン」の感覚を最後に、炎熱と爆風と放射能に倒れた。思いつく限りの、人間世界のことばを駆使しても表現できぬほどの一瞬は、被爆した側からいえば突発事件であったが、投下した側からいえば予定の行動であった。わたしの実家のほうの父と母、わたしの夫のほうの父と母、つまり二人ずつの父と母は、焼き殺された。わたしはまる一日後の八月七日朝、広島市にはいり、四人の父母をさがしまわった。そして焼け跡に残っていた放射能を、知らぬ間に浴びていて、わたしも被爆者になった。

一枚の色紙と手紙が、さまざまな思いをくりひろげるきっかけを作る。サインペンの寄せ書きを書いてくれた十数人はもちろん、広島子どもを守る会に集まった、八十五名の子らの父や母たちも、まだ幼かったこの子らを残して、生きながら燃えつきたのだ。残された幼い者の、原爆孤児と呼ばれる

日々が、あの日、八月六日を起点として始まった。

「……広島子どもを守る会に集まっていたあの頃、わたしたちはちっとも、しあわせでもないのに、なにかといえやしあわせの歌を、よくうたいましたね。いまおとなとなったわたしたちは、久しぶりで会い、晴れてしあわせの歌を、うたおうじゃないかということになり、昔のように腕を組んで、みんな一生懸命でうたいました……」

手紙の一節にこうあった。何か、どきりとする思いが胸をついた。たしかにあの頃、子どもらと集まると、「しあわせの歌」をよくうたった。「原爆許すまじ」をうたおうか、と世話役の誰かがいっても、他の誰一人「うん」といわない。「ふるさとのまち焼かれ／身よりの骨埋めし焼け土に／いまは白い花咲く」、あの美しくかなしい歌は、子らとはどうしてもうたえなかった。「三たび許すまじ原爆を」と力強くもりあがるのだから、と思っても、寝てもさめても生活の苦勞と、孤独感の下まんにいる子らとともに、のどがつかまってうたえない。そこでいつのまにか集まりのときの歌は、しあわせの歌になった。

「しあわせはおいらの願い／仕事はとっても苦しいが」、腕を組んで、右に左にゆれながらうたう。

「甘い思いや夢でなく……朝焼けの山河を守り」、これなら最後までうたえた。だが、「しあわせでもないのに、しあわせの歌をよくうたいましたね」と敏子が書いているように、あの頃子どもたちの、どこかおぼつかない目がみつめるしあわせは、どんなに手をのばしても決してとどかない、はるか彼方のものだったのだ。歌の上だけのしあわせを、いわれる通りに口を動かしていたのではなかったら

うか。わたしはそれこそ、子どもを励ますつもりで、大声で、音頭までとってうたったものだ。

「晴れてきょうはうたいました」。ほっとした気持ちにもなる。「しあわせ」がどんなにはるかなものであっても、それをさぐりあてる道を、いまは自分の足で歩くことができる。みんな、おとなになったのだ。「息つくひまもない忙しさ」で、生活ととっ組んでいる顔を思い浮かべた。当時の子ども時代のおもざしから、いまの働きの顔をおしはかり、手紙と色紙を机に広げて、わたしもしあわせの歌を口ずさんでみる。だが、うれしい思いにひたってばかりいるわけにはいかない。実は八十五名すべてが、「晴れて」しあわせの歌をうたえる現状であるとはいえないのだ。

S枝の手は冬も、夏も、かさかさでしなびていた。小学生の手と、どうして思えよう。無口の上に、小きさみにふるえていることがよくあった。そこまでおびえて暮らすS枝に、ひと通りのなぐさめ、励ましがなんの役に立とうか。

S枝には姉がいたが、行くえがはっきりしない。S枝は一人で「近所のおじさん」一家に、身を寄せていた。その頃、赤線区域と呼ばれていた町だ。中学生になった秋、ふいにいなくなってしまった姉をたよって？大阪方面に行ったらしいが、その後の消息は一切わからない。いなくなる数日前、会の事務局にきた。会の仕事の協力者、というよりもすっかり手伝ってもらっていた、図書館員の辻岡敦子さんが、S枝の手のひらに、さくら貝を何枚かのせてやった。

「M君のおばあちゃんから、ついさっき、もらったんよ、ちょうどよかったねえ」

辻岡おねえさんがほえんで、S枝をのぞきこむと、日頃の無口に似ず、S枝は、「ありがとう」、